

第3回蔵前ゼミ印象記

関口さん： 人生の要ともいえる「人とのコネクション作り」に役立つ同窓会活動への参加の勧め。社団法人格を持つ同窓会は、我が「蔵前工業会」のみで、日本工業倶楽部に次ぐ第2号の社団法人として認められた。蔵前工業会の活動や会員のメリットが熱い語り口で紹介されたので、入会を決意した人も多かったのではなかろうか。便利でパワフルな蔵前カードを無料で持てるというのも魅力だ。これを利用しない手はない。先輩たちが築いた東工大の信用力に感謝しよう。「入社したら3年間は辞めるな」というのも心に残った。それでも どうしてもという時はどうするか……ここで、2年でHondaを円満に辞めた関口さんの友人のエピソードが紹介された。その人は恩師に相談に行ったそうだ。そのアドバイスにさすがと痺（しび）れた。この話はセミナーに参加した人のみが享受すべき特典だろうから、ここで私が明かすわけにはいかない。関口さんは蔵前ゼミの世話人で毎回出席しておられるから、次回（第4回）終了後の懇親会の席でたずねてみることをお勧めする。恩師の名は松田武彦。後に本学の学長をつとめることになる先生である。松田学長のときに、バイオ系学部の設置が初めて話題になったとも聞いているので、私にとっても特別の人である。もう1つ松田先生といえば忘れがたい話がある。私が長津田地区でライオンズマンションを買おうとしていたときのセールスマンいわく「東工大の先生といえば、松田先生もライオンズマンションにお住みで、隣り合わせに2戸買っていたのですよ。一戸は書齋としてお使いのようです」。

浦田さん： 神戸製鋼で溶接の研究をしていたときに交通事故に会い、特許部門の立ち上げを任されるようになったのが知財畑を歩くきっかけになった。知財一筋かと思えば、バブル絶頂期に社内公募に応募して米国でベンチャー企業の買収を手がけたり、バブル崩壊後は窓際族を3ヶ月間も経験したり、効率化を追及してリストラを断行したのはよかったが最後にたどり着いた結論が自分自身のリストラだったり、そして最終的に落ち着いたのが「文化の違う女子大」と波乱万丈。世界の現状を分析した上でイノベーションと知財について深く考察し、私たちに分かりやすく解説してくださった本題は“名講義”だった。製造立国から知財立国にうまく移行しなければならないこと、知財が経済戦の道具にもなること、変化にはチャンスとリスクの両面があることなどが印象に残った。時代に迎合せずに自分の型で生き抜いた浦田さんの話の締めくくりの言葉は、「浮つかずに、擦り寄らずに、正々堂々と、死ぬまで研鑽」「役割に遭遇したら徹底的にやり、役割が済んだら静かに去る」でした。そうそう、「なるようになれ」という開き直りも大切というのは同感です。

懇親会での挨拶（**錦織さん**）： 遅刻したので途中から聞いた話……バブル期やサブプライムローンで荒稼ぎをしようとしたのは一部の金持ち（金融関係者）というのは誤解で、その人たちの納めた莫大な税金で潤ったのは政府だ。立派すぎる都庁舎が建ったのも、日本の国家予算に匹敵する戦費をイラクにつぎ込めたのも、バブルと無関係ではない。こう聞いてふと思った。一時期 大学の建物が次から次へと新しくなったのもバブルのお陰？

（推敲していないメモです。生命理工学研究科長 広瀬茂久）